
狙撃兵の日記

A市市庁市史編纂室長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狙撃兵の日記

【Nコード】

N5143D

【作者名】

A市市庁市史編纂室長

【あらすじ】

知る人しか知らないシリーズ第2弾。今度は亜熱帯の戦場。狙撃兵のマリーン・ボーイ。

(前書き)

狙撃兵のはなしです。狙う側と狙われる側との緊迫感が出ていれば良いなと思います。

「弾も、砲弾の破片も、当たる時は当たるし、当たらないときは当たらない。ゆえにこれに留意する必要は無い。ただし狙撃兵だけに注意せよ。何故なら、それには当たるときも当たらないときも無い。百発百中だからだ」。海兵隊野戦教範より。

肩に届くか届かないかぐらいのところで切りそろえられた黒髪。くせがなくさらさらで、ちよつとした風にもなびく。可愛らしい小顔には、しかしツンとした表情をたたえている。

周囲に指示を出しているところを見ると彼女が指揮官なのだろう。ほかにそれらしい者も見当たらないし、腰に拳銃のホルスターをつけている。

残念。かわいい女の子なのに。16もいってないんじゃないか。

ま、だとしても僕も同じだけだ。

僕はそれだけ考えると、双眼鏡メガネを置いた。そして脇に立ててあったライフルを引き寄せる。腰のポケットからガムを取り出して口に入れる。

足元が冷たい。昨夜の雨のせいで毛布がずぶぬれになってしまったのだ。しかし体に巻いてある毛布を取る気にはなれない。こんなジャングルで、地面に何がいるか知れたもんじゃない。とても野戦服一枚で寝転んでいる気にはなれない。

ライフルの銃床を脇に挟み、しっかり固定する。口の中では、粘つき始めたガムがくちやくちやくと音を立てる。周囲のジャングルからは、もう慣れてしまったような不気味な鳥のさえずりがする。しかし、それ以外に音は無い。

コックを上にあげ、手前に引く。ガチャ、ガチャリという金属音が妙にはっきりと響く。安全装置が外れているのを確認して、照準装置を覗き込んだ。

いらいら。そう口に出してしまいそうだ。

昨日、ピモアンの師団司令部から送られてきた71人の補充兵たち。一週間の速成訓練だけでは仕方が無いことかもしれないが、あまりにも手際が悪すぎて腹が立つ。

私は連隊長に命じられて、彼らを引きつれ「首切り峠」で苦戦しているE中隊の援護に行かなければならない。今日中に。

しかし、彼らの行軍速度はあまりにも遅かった。私のことを「小娘」だの言って馬鹿にするくせに、一行程もしないうちに疲れたと言いつつ始末。しょうがないから小休止にしてみればしてみたで、水を探しに行った奴らが帰ってこない。

逃亡か、道に迷ったか。まあ、役立たずと言っても邦^{クニ}を守ることに關しては純粹なやつらなようだから、おそらく後者だろう。しかしだとしたら本当に役に立たない。

比較的ましな奴を隊長にして搜索隊を出したのが1時間と半分前。ところが最初のやつらどころか搜索隊まで帰ってこない。目下2次搜索隊を編成中。

これでは今日中に「首切り峠」は無理かもしれない。しかし無理で済まされることでもないだろう。もしこの遅れが原因で峠が突破されたら。ただでさえ多い敵。縦深の浅い陣形の連隊は総崩れしかない。

この時間が、今どうしようもなく突っ立っているこの時間が、連隊の首を絞めてしまっているかと思うと、もう。

少しでもいらつきを抑えようと前髪を掻き揚げてみるが、何か変わるものでもない。

2次搜索隊の隊長が出発準備完了を報告した。

スコープの中心に少女の姿を捉える。肩幅からして600メートルくらいだろう。照準機を600にあわせる。

ぶかぶかの帽子を被った可愛い頭に照準を合わせる。まだ、指は

用心鉄にかけたまま。ごめんなさい。神様。お母さん。可愛い女の子の頭を撃ち抜きます。

指を引き金にかける。ゆっくり息を吐く。一瞬ぼうつとして、それからゆらいだ焦点が合う。

その一瞬をねらって、僕は、引き金を引いた。

銃声は、遠かった。

目の前、2次搜索隊の隊長がうめきながら鼻を押さえている。指の隙間からは血。狙撃だ。

「全員！伏せろっ！」

言いながら自分も野に伏せる。油断していた。いらつきすぎて、敵の狙撃兵のことなんて考えても見なかった。まったく。くそ。

外した。風が吹いてる。思いながら、手が動く。コックを引いて押し戻し再装填。空薬莖が音も無く地面に落ちる。

こうなったら、あの子をヤルしかない。距離は600メートルあるが、しょせん600メートルだ。やつら機関銃も持ってる。逃げ切れないかもしれない。頭つぶして混乱させるしかない。

地面に伏せている彼女。しかし、山の上のここからはその背中まで丸見え。今度は風も計算に入れて、照準する。

もう余裕がなくなっていた。すぐに引き金を引いた。

一瞬し、彼女の体が少し跳ねた。気がする。血は見えない。もう一発。再装填し、今度は背中に叩き込む。

今度は血が出た。彼女の軍服の背中が茶色く染まる。でも背中だ。もう一発。

彼女は相変わらず伏せたままだが、頭が地面にのめり込む形になっている。やった。

数秒、野に横たわる彼女の死体を見つめてから、立ち上がる。木の根元に隠してあったザックを担ぎ、ライフルを肩にかける。毛布をたたんで腰に巻きつける。

ああ、怖かった。今回は早めに切り上げよう。
草の間に転がった空薬莢を4つ拾い上げてポケットに入れると、
南に向かって歩き出した。

77／Aug／12

戦果…かわゆい女の子一人。多分中尉。

神よ、罪深き我を許したまえ。

陸軍第110空挺連隊G中隊キャンプにて
陸軍のレーションはまずい。

（後書き）

どうだったでしょうか。感想をいただければうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5143d/>

狙撃兵の日記

2010年12月26日03時02分発行